

場所名詞句との結合頻度に現れる韓国語の移動動詞の語彙的な意味の特徴

イ 李 ソ 善 ニ 姫

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

動詞の中には、‘移動主体の位置変化をあらわす’という語彙的な意味をもつ「移動動詞」と呼ばれる動詞がある。例えば、「가다 (行く)」「오다 (来る)」「떠나다 (離れる／発つ／去る)」のような動詞である。これらの移動動詞は、その語彙的な意味から出発点や到着点など、場所をあらわす場所名詞句と結びつくことができる。

- (1) 서울에서 부산으로 갔다.
ソウルからプサンへ行った。
- (2) 서울에서 부산으로 떠났다.
ソウルからプサンへ発った。

例えば、「가다」「떠나다」は、(1)(2)のように「서울에서」という出発点をあらわす場所名詞句、「부산으로」という到着点をあらわす場所名詞句と結びつくことができる。しかし、実際の言語使用においては、それぞれの動詞は出発点や到着点をあらわす名詞句との結合頻度が同じく現れるわけではなく、偏りがみられる。「가다」は到着点をあらわす名詞句との結合頻度が高く、「떠나다」は出発点をあらわす名詞句との結合頻度が高い。

「가다」「떠나다」だけではなく他の移動動詞も、実際の言語資料において出発点、到着点などの場所名詞句との結びつきに偏りがみられるのであ

る。このような結合頻度の偏りは、移動動詞の語彙的な意味と関係があり、場所名詞句との結合頻度の実態から移動動詞の語彙的な意味の側面を探ることができるのではないかと考える。

そこで、本稿は実際の言語資料における移動動詞と場所名詞句との結合頻度を調査し、その結合頻度に基づいて移動動詞の語彙的な意味を考察することにしている。

1.2. これまでの研究

移動動詞に関わる研究は多くあるが、その多くが移動動詞全般を対象にしたものではない。

まず、「가다 (行く)」「오다 (来る)」のみを対象に研究を行ったものが多い。고석주 (2007) は主に移動主体の基準点から「가다, 오다」の意味を考察し, 오경숙 (2009) は, 移動主体が「話者の場合, 聴者の場合, 第3者の場合」に分け, 「가다, 오다」の使い分けを考察した。김신희 (2009) も「가다」のみを研究対象にしたものであり, 移動動詞を幅広く研究したものではない。

次に, 「-에」「-로」「-를」のような助詞に焦点を当てた研究が多い。이남순 (1983) は「-에」「-로」「-를」について考察し, それぞれの助詞のあらわす意味の違いについて示している。남기심 (1993) は, 実際の言語資料からデータを採集し, 「-에」と「-로」が結びつく動詞を意味的に分類し, 結びつく名詞の意味的な特徴を詳しく示した。이선희 (2018) も実際の言語資料に現

れる「-에 가다」「-로 가다」「-를 가다」を調べ、「가다」と結びつく「-에」「-로」「-를」に見れる名詞の意味的な特徴を明らかにした。さらに、文法的な諸相から考察を行い、アスペクトやムードの形式においても「-에」「-로」「-를」の現れに偏りがあることを示した。しかし, 이남순 (1983), 남기심 (1993), 이선희 (2018) は移動動詞全般を研究対象にはしていない。

また、移動動詞の結合する意味格から移動動詞の意味構造を形式化して示している남승호(2003)があるが、実際の言語資料の使用を調べて考察したものではない。

よって、本稿では移動動詞と場所名詞句との実際の結合頻度から移動動詞の語彙的な意味を考察することにする。

1.3. 研究対象について

1.3.1. 研究対象動詞と言語資料

本稿の研究対象動詞は、李善姬 (2009) の研究対象である日本語の移動動詞を参考に選定した、韓国語の移動動詞 (異なり語数8) である。

研究に用いる言語資料は, 국립국어연구원 (2007) の「21세기 세종계획 균형말뭉치」の「구문분석말뭉치(構文分析コーパス:65MB)」である。

1.3.2. 研究対象の範囲

本稿の研究対象は、「有情物である移動主体の空間的な位置変化を表す」ものである。「移動主体」を有情物に限る理由は、次のとおりである。

まず、有情物が移動主体の場合は、「그가 그쪽으로 갔다 (彼がそちらの方へ行った)」「그는 학교를 갔다 (lit. 彼は学校を行った)」のように、「-로」「-를」の両方とも結びつくことができる。それに対して、「風」のような非情物が移動主体の場合は、「바람이 그쪽으로 갔다 (風がそちら

の方へ行った)」は可能であるが、「*바람이 학교를 갔다 (lit. 風が学校を行った)」という結びつきは不可能である。このように同じ動詞であっても、場所名詞句との結びつきにおいて制限がみられるため、有情物と非情物を区別して考察する必要があると考える。

1.3.3. 研究データ採集の基準

動詞のすべての活用形を対象にしたが、「-아/어 있다」「-고 있다」のような形は、位置変化の結果継続や動作継続をあらわす、アスペクト的な意味と関係がある形である。それによって結びつく場所名詞句にも制限があり⁽¹⁾、動詞本来の場所名詞句との結びつきの様子を調べるのが難しい。このような理由で、「-아/어 있다」「-고 있다」のような形は研究対象外とする。

2. 動詞と場所名詞句の結合頻度

2.1. 動詞と場所名詞句の結合頻度

各移動動詞と場所名詞句との結合頻度を次の表1に示す。

表の見方については以下に示す：

- 1) 「動詞」は研究対象にした動詞を示す。
- 2) 「助詞」の「-로」から「-까지」までは、当該動詞がそれぞれの助詞であらわされる場所名詞句と結びついた用例数で、「%」は当該動詞の用例数に対する、それぞれの場所名詞句と結びついた割合である。ただし、「가다」と「오다」の場合は、1文中に同時に2つの場所名詞句と結びつく例があるため、割合を合算すると100%を越える。
- 3) 「φ」は「그들이 왔다. (彼らが来た)」「나는 안 갔어. (私は行かなかった)」のように場所名詞句が現れていない用例である。

表 1 動詞と場所名詞句の結合頻度

助詞 動詞	-로 ⁽²⁾	%	-를 ⁽³⁾	%	-에	%	-에게 ⁽⁴⁾	%	-에서	%	-까지	%	その他 ⁽⁵⁾	%	φ	%	用例数
향하다	41	93.2	2	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2.3	44
가다	242	20.4	58	4.9	338	28.4	23	1.9	5	0.4	31	2.6	5	0.4	489	41.1	1189 ⁽⁶⁾
오다	44	7.5	1	0.2	100	17	6	1	42	7.1	22	3.7	1	0.2	376	63.7	590 ⁽⁷⁾
모이다	8	5.3	-	-	47	31.3	-	-	-	-	-	-	-	-	95	63.3	150
건너다	-	-	22	78.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	21.4	28
헤매다	-	-	11	61.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	38.9	18
떠나다	29	8.7	120	35.9	-	-	-	-	12	3.6	-	-	4	1.2	169	50.6	334
걸다	4	4	20	20	-	-	-	-	-	-	4	4	-	-	72	72	100
計2,453																	

2.2. 結合頻度による動詞の分類

表 1 の各動詞と場所名詞句との結合頻度をみると、「-로」との結合頻度が最も多い動詞, 「-를」との結合頻度が最も多い動詞, 「-에」との結合頻度が最も多い動詞の三つに分かれる。それを示すと次のとおりである:

- 1) 「-로」との結合頻度が最も多い動詞:
향하다
- 2) 「-를」との結合頻度が最も多い動詞:
건너다, 헤매다, 떠나다, 걸다
- 3) 「-에」との結合頻度が最も多い動詞:
모이다, 가다, 오다

2.3. 各名詞句の考察と再分類

本稿で考察対象にした移動動詞は、表 1 の結合頻度から 2.2 のように分類できる。しかし、実際の用例をみると、同じ名詞句であっても、結びつく動詞によってあらかず意味に違いがみられ、場所名詞句の意味の考察が必要であると考えられる。以下では、それぞれの場所名詞句の意味について考察を行い、それによる場所名詞句の再分類を行う。

2.3.1. 「-로」

「-로」の場所名詞句が現れる例をみよう:

- (3) 민이는 할아버지와 함께 서울로 왔습니다. (BGGO0098)
ミニはおじさんと一緒にソウルへ来ました。
- (4) 모두 남쪽으로 가네. (BGAE0200)
みんな南の方へ行くんだね。
- (5) 우리 오늘은 독길로 가자. (BGHO0437)
今日は土手道で行こう。

(3)の「서울로」は、到着点として考えることができるだろう。それに対して、(4)の「남쪽으로」は到着点というより、方向である。また、(5)の「독길」は、(3)や(4)のように到着点や方向をあらわすものではなく、「土手道を通して」ということをあらわす経由点として考えられる。

以上のような例から、「-로」であらわされる場所名詞句は、「到着点」「方向」「経由点」の3つがあることがわかる。

2.3.2. 「-를」

「-를」が現れる用例をみると、結びつく動詞によって、「-를」があらわす場所名詞句の意味に違いがみられる:

- (6) 어서 빨리, 어서 빨리 이곳을 떠나시오. (BGE00318)

早く, 早く, ここを離れなさい。

- (7) 흙 묻은 손을 탁탁 털고는 양쪽 소매 속에다 두 손을 꼭 디밀어 꽂고는 그냥 투덕투덕 발소리를 내어 가면서 길을 걸었다. (BGGO0358)

土のついた手をパタパタとはたいては、両袖の中に両手を突っ込んで、ただドンドンと足音を出しながら道を歩いた。

(6)と(7)の場所名詞句はすべて「-를」で見られているが、それぞれあらかず意味は異なる。(6)の「이곳을」は、「ここから」という出発点としてみることができる。しかし、(7)の「길을」は、通っていく場所をあらかずしているものであって、(6)と同じ意味ではない。このように「-를」のあらかず場所名詞句は、「出発点」をあらかずものと、経過する場所の「経過点」をあらかずものがあることがわかる。

ところが、経過点をあらかずものにも違いがみられるものがある：

- (8) 내가 그만 보고 가자고 쿡쿡 찌르니까 동욱씨가 일단 건너가자, 해서 횡단보도를 건넜어요. (BGEO0294)

私がもう見ないで行こうとついたら、トンウクさんがいったん渡って行こうと言うので横断歩道を渡りました。

(8)も(7)と同じく経過点を意味するようにみえる。しかし、詳しくみると、「건너다 (渡る)」は語彙的な意味に限界性が含まれている動作動詞で、「-를」で示されている場所の「横断歩道」を完全に通過することによって、「건너다」のあらかず動作が成立する⁽⁸⁾。つまり、「経由点」として考えられる。実際の用例にも「횡단보도 (横断歩道), 강 (川), 국경 (国境)」のような場所名詞が多くみられる。

それに対して、(7)のように語彙的な意味に限界性が含まれていない動作動詞の「걷다 (歩く), 헤매다 (さまよう)」の場合は、「-를」で示される場所を通過することはあらかず、動作の開始とともに動詞のあらかず動作が成立することになる。この場合の場所名詞句は「経路」として考えられる。

(8)の経由点を通り抜ける動作は、次の図1のaのように、(7)の経路を通っていく動作は、図1のbのように示すことができる。

さらに、次のような例がある：

- (9) 그래서 나도 그 날 친구들을 데리고 저녁을 사주러 오뎅이식당을 갔습니다.

(BGGO0098)

それで私もその日友達を連れて夕食を奢りにオットウギ食堂に (lit. 食堂を) 行きました。

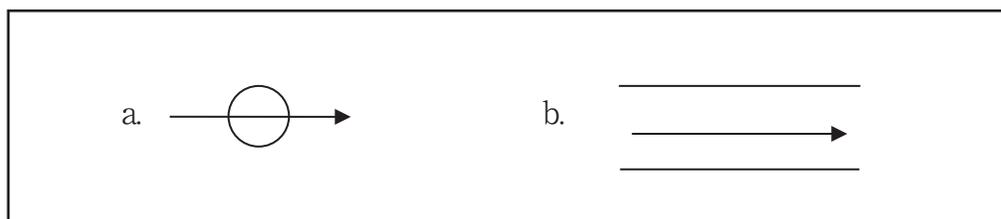


図1 経由点を通りぬける動作と経路を通っていく動作

(9)の「오뎅이식당」は(6)(7)(8)とは違う，到着点として考えられるだろう。

以上の例から，「-를」であらわされる場所名詞句は，「出発点」「経路」「経由点」「到着点」の4つがあることがわかる。

2.3.3. [-에] [-에게] の名詞句

「-에」「-에게」であらわされる場所名詞句は，次の例のようにすべて到着点をあらわしている：

- (10) 사람들이 모두 세호의 돌토끼 앞에 모였어요. (BGGO0098)

人々がみんなセホの石のウサギの前に集まりました。

- (11) 단장 부인이 단원인 최진희에게 가서 무대에 설 때 당분간 새로 온 단원과 옷을 교대로 갈아입으라고 지시했다.

(BGEO0320)

団長夫人が団員であるチェジニのところに行つて，舞台上に立つ時，しばらく新しく来た団員と服を交互に着かえろと指示した。

2.3.4. [-에서]

「-에서」⁽⁹⁾であらわされる場所名詞句は，出発点をあらわしている：

- (12) 한국서 오셨죠? (BGGO0098)

韓国から来られましたよね。

- (13) 나는 서울에서 떠날까 하는데 (BGEO0320)

私はソウルから離れようかと思ってるんだけど。

2.3.5. [-까지] 「その他」

「-까지」であらわされる場所名詞句と「その他」

の場所名詞句について考察してみる：

- (14) 우리는 묵묵히 남산까지 걸었다.

(BGEO0320)

私たちは黙々と南山まで歩いた。

- (15) 대왕께서 돌아가신 뒤 우리 왕국은 에게해 (海)로부터 온 해양 민족들때문에 ~.

(BGEO0317)

大王が亡くなった後，我々の王国はエーゲ海から来た海洋民族のせいであらう。

- (16) 오전에 목적지를 향해 떠날 때와는 분위기가 사뭇 달랐다. (BGEO0077)

午前中に目的地に向かつて発つた時とは，雰囲気全く違っていた。

(14)の「남산까지」は，移動範囲をあらわすものであり，到着点として考えることは難しいだろう。

(15)の「에게해로부터」は確かに出発点であるが，「-로부터」は「-로」と「-부터」が複合した形であり，前に来る名詞の語彙的な意味の考察も必要であるだろう。(16)の「-를 향해」は，「향하다(向かう)」が移動動詞的な性格をなくし，「-를」と結びついて，後置詞的な働きをしている例であり⁽¹⁰⁾，これらに関しては，別に研究する必要があると思われる。

以上のような理由から，「-까지」と「その他」の用例は，今回の研究対象から外す。ただし，説明の上で例を挙げることはある。

2.3.6. 本稿での場所格の分類

本稿では，2.3.1～2.3.4の考察結果に基づき，場所名詞と格助詞が結合し，出発点，経過点，方向，到着点としてはたらく場所名詞句のあらわす格を「場所格」とし，次のように分類する。

- 1) 出発格: 「학교에서 오다 (学校から来る) / 집을 떠나다 (家を発つ)」のように、出発点をあらわす格
- 2) 経過格: 経過格は「経路格」と「経由格」に分類する。
 - ① 経路格: 「길을 걷다 (道を歩く)」のように、経路をあらわす格
 - ② 経由格: 「다리를 건너다 (橋を渡る) / 이길로 가다 (この道で行く)」のように、経由点をあらわす格
- 3) 方向格: 「남쪽으로 가다 (南の方へ行く)」のように、方向をあらわす格
- 4) 到着格: 「집에 가다 (家に行く) / 집으로 가다 (家へ行く) / 집을 가다 (家に行く)」のように、到着点をあらわす格

格に違いがみられる。最も多く結びつく場所格によって次のように示すことができる。方向格と最も多く結びついた動詞はないため分類に入っていない:

- 1) 出発格と最も多く結びつく動詞: 떠나다
- 2) 経過格と最も多く結びつく動詞
 - ① 経路格と最も多く結びつく動詞: 헤매다, 걷다
 - ② 経由格と最も多く結びつく動詞: 건너다
- 3) 到着格と最も多く結びつく動詞: 향하다, 가다, 모이다, 오다

2.4. 場所格との結合頻度と分類

2.4.1. 場所格との結合頻度

2.3.6の場所格によって、移動動詞と場所格との結合頻度を再度調べた結果が表2である。各動詞が各々の場所格との結合頻度が高い順に示した。

2.4.2. 場所格との結合頻度による動詞の分類

表2をみると、各動詞は最も多く結びつく場所

3. 分析

2.4.2で分類した動詞を分析していくことにする。

3.1. 出発格と最も多く結びつく動詞:

떠나다

「떠나다」は、出発格との結合頻度が40%で、場所格の中で出発格との結びつきが最も高い割合

表2 動詞と場所格との結合頻度

場所格 動詞	出発格			経過格						方向格		到着格				場所格無し		用例数	
	-에서	-를	%	経路格			経由格			-로	%	-에	-로	-를	%	φ	%		
				-를	-로	%	-를	-로	%										
떠나다	12	120	40	-	-	-	-	-	-	5	1.5	-	24	-	7.3	169	51.2	330	
헤매다	-	-	-	11	-	61.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	38.9	18	
걷다	-	-	-	20	-	20.8	-	-	-	4	4.2	-	-	-	-	72	75	96	
건너다	-	-	-	-	-	-	22	-	78.6	-	-	-	-	-	-	6	21.4	28	
향하다	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2.3	-	40	2	95.4	1	2.3	44	
가다	5	-	0.4	12	-	1	-	6	0.5	28	2.4	361	209	46	53.4	489	42.4	1154	
모이다	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	47	8	-	36.7	95	63.3	150	
오다	42	-	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-	106	44	1	26.6	376	66.3	567	
																			計2,387

をみせている：

- (17) 그래서 나는 6 년간 살았던 보르도를 떠
나 빠리로 왔다. (BGEO0294)
それで私は6年間住んでいたボルドーを
離れ, パリに came。

出発格は「-에서」や「-를」であらわされるが、「떠나다」の場合は134例中120例が「-를」で現れている。出発格が「-를」で現れるのは「떠나다」以外はなく、出発の位置変化を主にあらわす動詞の特徴として考えられる。

「떠나다」は、出発格以外に到着格と7.3%、方向格と1.5%の結びつきもみせている：

- (18) 그는 그걸 배에 싣고 제주도로 떠났다. (BGHO0437)
彼はそれを船に積んで濟州道へ発った。
(19) 조금 뒤 두 여자는 손을 맞잡고 마을 쪽
으로 떠났다. (BGEO0077)
少し後に二人の女は手を握り合って村の方へ去った。

(18)は到着格, (19)は方向格と結びついた例である。しかし、二つとも「제주도, 마을」に向かうことをあらわすだけで、移動主体が到着点の「제주도, 마을」に到着したことまでは含まれていない。つまり、到着格と結びついても到着の位置変化をあらわすことまでは意味しない。

表2をみると、到着格が「-에」ではなく、全て「-로」であり⁽¹¹⁾、後述する到着格と最も多く結びつく動詞とは異なる側面をみせる。

以上のことから、「떠나다」は主に出発の位置変化をあらわす動詞であることがわかる。また到着格と結びついても、到着の位置変化まではあら

わさず、ただ到着点へ向かうことをあらわす到着志向の動詞であることがわかる。

3.2. 経過格と最も多く結びつく動詞

3.2.1. 経路格と最も多く結びつく動詞：

헤매다, 걷다

「헤매다」は経路格と61.1%、「걷다」は経路格と20.8%の結合の割合をみせ、両動詞は次のように主に経路を通して動作をあらわすことがわかる：

- (20) 정강이까지 폭폭 빠지는 눈길을 걸어 현
우는 우미관까지 왔다. (BGGO0358)
脛までズボズボとはまる雪道を歩いて
ヒョヌはウミ館まで来た。
(21) 검은 외투를 입은 스무살의 나는 무거운
빨간 보따리를 들고 신촌의 인쇄집 골목
을 헤매었다. (BGEO0294)
黒いコートを着た二十歳の私は、重い赤
い包みを持って新村の印刷屋の路地をさ
まよった。

ところが、「헤매다」は経路格とのみ結びつくのに対して、「걷다」は次の(22)のように方向格と結びつき(4.2%)、「ある場所へ向かう」ことをあらわすこともできる：

- (22) 주인은 파출소를 뒤로 하고 서커스 천막
이 있는 쪽으로 부지런히 걸었다. (BGHO0437)
主人は交番を後にして、サーカスの天幕がある方へ一生懸命歩いた。

「헤매다」の場合は、「*서커스 천막이 있는 쪽으로 헤맸다」(サーカスの天幕がある方へさまよ

た)」のように、方向をあらわす場所名詞句と結びつくことは難しく、「걷다」とは違って、方向性のない動詞であることがわかる。

さらに、「걷다」は「헤매다」とは違い、次のように距離、範囲との結びつきもみられる：

(23) 그는 집을 떠나서 정남으로 10km를 걸었
고, ~ (BGHO0409)

彼は家を離れ、真南へ向かって10kmを歩いて、～。

(24) 그래서 우린 남편을 마중하러 남편의 수업이 있는 쏘르본느 대학까지 걸었다.

(BGEO0294)

それで私たちは夫を迎えに夫の授業があるソルボンヌ大学まで歩いた。

以上のようなことから、「헤매다, 걷다」は主に経路を通っていく動作をあらわすが、「헤매다」は「걷다」とは異なって方向性のない動詞であり、「걷다」は方向性をもつ動詞であることがわかる。

3.2.2. 経路格と最も多く結びつく動詞：

건너다

「건너다」は経路格と78.6%の高い結合をみせ、主にある場所を通り抜ける動作をあらわしている動詞である⁽¹²⁾：

(25) 채 스무살을 넘기지 않은 나이 어린 청년들이 국경을 건너 만주로 넘어갔고, ~.
(BGBZ0073)

まだ二十歳も過ぎていない若い青年たちが国境を越えて満州へ渡っていき…。

3.3. 到着格と最も多く結びつく動詞：

향하다, 가다, 모이다, 오다

「향하다, 가다, 모이다, 오다」は、到着格との結びつきがそれぞれ95.4%, 53.4%, 36.7%, 26.6%と、到着格との結びつきに高い割合をみせ、次の例のように、主に移動体の到着の位置変化をあらわしている：

(26) 헤자는 차를 몰아 일산으로 향했다.
(BGEO0294)

ヘジャは車を運転してイルサンに向かった。

(27) 출국 전날 김의 집에 가서 작별인사를 했다. (BGEO0294)

出国の前日、キムの家に行って別れの挨拶をした。

(28) 단장까지 합쳐서 열네 명이 공연장 안에 모였다. (BGEO0320)

団長まで合わせ14人が公演会場の中に集まった。

(29) 박경리 씨는 사보텐 화분을 보자기에 싸서 들고 우리집에 왔다. (BGHO0431)

パクキョンリさんはサボテンの植木鉢を風呂敷に包んで持って我が家に来た。

ここで注意すべき点は、表2をみると、「향하다」の場合、到着格が(26)のように全て「-로」であるのに対して、「모이다」は(28)のように「-에」で現れているという点である。

「향하다」のあらわす意味は、到着点への位置変化はあらわさず、ただ到着点に向かっただけで移動行為が成立する、到着志向をあらわしている。それに対して、「모이다」のあらわす意味は、到着点への位置変化が完了することで移動行為が成立することをあらわしている⁽¹³⁾。

また、「향하다, 가다, 오다」は、到着格に「-를」が現れるが、「모이다」の場合は、到着格に「-를」

は現れず、「-를」と結びついた例は考えられない：

- (30) 선실을 빠져나와 급히 홀의 화장실을 향하다가 나는 나직나직한 자장가 소리를 듣게 되었지. (BGE00294)

船室を出て、急いでホールのトイレに (lit. トイレを)向かう途中、私はやや低めの子守歌の声を聞いた。

- (31) 전씨는 “그렇지만 곳은 일이라는 생각때문에 젊은이들이 서비스업종 등 편한 일만 찾아 이제는 어느 공사장을 가도 우리 또래는 볼 수가 없다” 고 말했다.

(BGAA0164)

チョンさんは、「でも、荒い仕事だという考えのせいで、若者がサービス業種など楽な仕事ばかり求めるので、今はどの工事現場に (lit. 工事現場を)行っても、私たちの世代は見る事ができない」と述べた。

- (32) 어찌하여 여길 왔느냐? (BGE00317)
 どうしてここに (lit. ここを)来たのか？

このようなことからみると、「-를」で現れる到着格は、到着の位置変化のみをあらわす語彙的な意味をもつ動詞とは結びつくことができないことがわかる。またこのことから、純粹に到着点をあらわすのは、「-에」であるとも言えるだろう。

「가다, 오다」は、次の(33) (34)のように出発格との結びつきができる：

- (33) 이곳에서 스위스 샹페리로 가는 것이 가장 쉽다. (BGAF0052)

ここからスイスのシャンペリーへ行くのが最も簡単だ。

- (34) 저희들은 서울에서 왔어요. (BGBZ0073)
 私たちはソウルから来ました。

「향하다, 모이다」の場合は、「부산에서 서울로 향했다 (プサンからソウルへ向かった)」や「전국에서 모였다 (全国から集まった)」のような作例が考えられるが、出発格と結びついた用例は、今回のデータにはなかった。

しかし、経路格、経由格との結びつきにおいては異なる様子を見せている：

- (35) 목마른 여우가 길을 가다가 포도를 발견하고는~. (BGHO0409)

のどが渴いたキツネが道を行く途中、ブドウを発見しては、~。

- (36) 이봐요, 이 길로 가면 훨씬 돌아가는 거잖아요. (BGE00292)

ほら、この道で行くと、ずっと遠回りじゃないですか。

「가다」は(35)の経路格、(36)の経由格との結びつきができる。「오다」は今回のデータにはなかったが、「산길을 오다 (山道を来る)」や「이길로 오다 (この道で来る)」のように、経路格や経由格と結びつく作例が考えられる。しかし、「향하다, 모이다」は経路格や経由格と結びついた用例がなく、作例を作ることさえも難しい。

また「가다, 오다」の場合は、次の範囲をあらわす場所名詞句との結びつきが可能である：

- (37) 다음날 제천역으로 다시 나가 중앙선 열차를 타고 영주까지 갔다. (BGE00320)

翌日、チェチョン駅にもう一度行き、中央線の列車に乗ってヨンジュまで行った。

- (38) 정강이까지 폭폭 빠지는 눈길을 걸어 현
우는 우미관까지 왔다. (BGGO0358)
脛までズボズボとはまる雪道を歩いて
ヒヨヌはウミ館まで来た。

3.2.1で「걷다」が「-까지」と結びつくことを確認した。このようなことからみると、「걷다」のように、語彙的な意味に限界性が含まれていない方向性をもつ動詞と、「가다, 오다」のように出発から経路, 経由, 到着までもがその語彙的な意味に含まれている動詞のみが「-까지」と結びつき, 移動の範囲をあらわすことがわかる。

以上のことから, 到着格と最も多く結びつく動詞であっても, 「到着の位置変化まではあらわさず, 到着志向をあらわす動詞 (향하다)」「到着の位置変化をあらわす動詞 (모이다)」「出発, 経路, 経由, 到着の全ての移動過程をあらわす動詞 (가다, 오다)」があることがわかる。

3.4. 場所格無しの用例

3.1 ~ 3.3まで場所格との結びつきから移動動詞の意味を考察したが, 場所格が現れていない用例からも移動動詞の語彙的な意味をうかがうことができる。表2をみると, 「場所格無し」の用例が当該動詞の50%以上を占める動詞がある。「떠나다, 걷다, 모이다, 오다」である:

- (39) 아내는 뒤돌아보지 않고 떠났다.
(BGEO0294)
妻は振り返らず去った。
- (40) 아버지, 영재가 왔습니다. (BGGO0358)
お父さん, ヨンジェが来ました。

まず, 「떠나다, 오다」の場合は, 場所格が現れなくても, (39)は「妻が話し手のいる場所から去っ

た」という出発点, (40)は「ヨンジェが話し手のいる場所に来た」という到着点が明確であることがわかる。言い換えれば, 出発点や到着点が明確であり, わざわざ言う必要がないのである。

それに対して, 「걷다, 모이다」は異なる:

- (41) 취객처럼 과장되게 흔들흔들 걸으며 ~.
(BGEO0294)
酒客のように大げさにゆらゆらと歩きながら~。
- (42) 어두운 밤에 비를 맞으며 걸어서 연천으로 떠났지만, ~. (BGGO0098)
暗い夜に雨に降られながら歩いてヨンチョンへ発ったけど~。
- (43) 대통령과 우리 정치지도자들이 모여 여야의 안보공조를 다짐했다고 한다.
(BGAC0031)
大統領と我々の政治指導者たちが集まって与野党の安保協力を約束したそうだ。

「걷다」の場所格無しの例は, (41)のように移動主体の移動様態をあらわすようなものか, (42)のように他の移動行為 (연천으로 떠나다) の様態をあらわすようなものである。(43)の「모이다」の例も, ただ「集まっている」状態だけをあらわしている。これらの例のように「떠나다, 오다」とは違って, 場所格を要求せず, 移動様態や移動主体の集まっている状態をあらわす場合があり, これが場所格無しの用例の多さに現れていると考えられる。

4. 終わりに

以上, 場所格との結合頻度から移動動詞を考察

した結果、次のように分類できる。それぞれの名づけは、最も多く結びつく場所格の名称をとり「～型」とし、大きく3つに分ける。さらに、3で考察した内容に基づき、下位分類をする。下位分類の名づけは、3の考察内容に基づいて名づけをする。

例えば、「出発到着志向型」は、主に出発の位置変化をあらわすが、到着志向をもあらわす動詞であり、「純粹到着型」は、到着格とのみ結びつき、到着の位置変化しかあらわさない動詞である。

1) 出発型

出発到着志向型：떠나다

(出発格は「-를」「-에서」:「-를」の
出発格は「出発型」のみ, 到着格は「-로」)

2) 経過型

① 経路型

経路無方向型：헤매다
(経路格は「-를」)
経路方向様態型：걷다
(経路格は「-를」, 方向格は「-로」)

② 経由型：건너다

(経由格は「-를」)

3) 到着型

純粹到着型：모이다
(到着格は「-에」「-로」:主に「-에」)
到着志向型：향하다
(到着格は「-로」「-를」)
到着経過出発型：가다, 오다
(到着格は「-에」「-로」「-를」,
経路格は「-를」, 経由格は「-로」)

本稿は実際の言語資料から移動動詞と場所格との結合頻度を調べ、場所格との結合頻度に見られる動詞の語彙的な意味を考察した。そして、従来

の先行研究では見出せなかった移動動詞の語彙的な意味の側面から分類を行うことができた。

例えば、到着型の動詞「모이다, 향하다, 가다, 오다」は、到着の位置変化という同じ語彙的な意味をもっているが、実際の場所格との結合頻度から調査をすると、場所格との結合において異なる様子を見せ、それぞれの動詞が異なる語彙的な意味の側面をもっていることを示めすことができたと思われる。これは結合頻度から接近することの有効性を示すことであると考えられる。

ただし、今回はかなり限られた動詞で調査を行い、見解が狭いのも事実であろう。研究対象の移動動詞をさらに増やして調査を行うことで、より具体的な移動動詞の語彙的な意味の多側面を見出し、移動動詞を体系的に位置づけることができると思われる。それは今後の課題としたい。

参考文献

강현화(1998) “국어의 동사연결 구성에 대한 연구”, 서울: 한국문화사
고석주(2007) ‘이동동사 “가다” 와 “오다” 의 의미 - 기준점 해석을 중심으로 -’, “한국어학” 36, 서울: 한국어학회
고석주(2011) ‘조사 “에” 의 의미 재고’, “국어학” 61, 서울: 국어학회
김신희(2009) ‘동사 “가다” 의 통사·의미부 대응에 관한 연구’, “국어학” 54, 서울: 국어학회
남기심(1993) “국어 조사의 용법 ‘-에’ 와 ‘-로’ 를 중심으로”, 서울: 박이정
남승호(2003) ‘한국어 이동 동사의 의미구조와 논항교체’, “국어연구” 39.1, 서울: 서울대학교 언어교육센터
노마히테키(2002a) “한국어 어휘와 문법의 상관구조”, 서울: 태학사
노마히테키(2002b) ‘한국어 단어결합론의 심화를 위하여’, “국어학” 39, 서울: 국어학회
송석중(1982) ‘조사 과, 를, 에의 의미분석’, “말” 7, 서울: 연세대학교 한국어학당
연세대학교언어정보개발연구원(1998) “연세한국어사전”, 서울: 두산동아
오경숙(2009) ‘한국어 이동동사 “오다” 와 “가다” 교육을 위한 문법기술’, “시학과 언어학” vol.17,

서울: 시학과 언어학회
 이금희(2012) ‘조사 “에”와 “으로”의 유의성에 대하여’, “국어학” 64, 서울: 국어학회
 이남순(1983) ‘“에”와 “로”의 통사와 의미’, “언어” 8, 서울: 한국언어학회
 이성하(2002) ‘이동동사의 후치사화에 관한 형태통사적 연구’, “언어와 언어학” 0-29, 서울: 한국외국어대학교 언어연구소
 임홍빈(1974) ‘{로}와 선택의 양태화’, “어학연구” 10-2, 서울: 서울대학교 어학연구소
 임홍빈(1979) ‘{을/를} 조사의 의미와 통사’, “한국학논총” 2, 서울: 국민대학교
 정희정(1998) ‘“에”를 중심으로 본 토씨의 의미’, “국어문법의 탐구Ⅳ”, 서울: 태학사
 홍재성(1983) ‘이동동사와 행로의 보어’, “말” 8, 서울: 연세대학교 한국어학당
 홍재성(1987) ‘현대 한국어 동사구문의 연구’, 서울: 탑출판사
 홍재성 외(1997) “현대 한국어 동사구문 사전”, 서울: 두산동아
 李善姬(2009) 「日本語の移動動詞の研究」博士学位論文, 東京: 東京外国語大学大学院
 李善姬(2018) 「単語結合から見た『-에 가다』『-로 가다』『-를 가다』」, 野間秀樹編著(2018) 所収
 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』, 東京: ひつじ書房
 言語学研究会編(1983) 『日本語文法・連語論』, 東京: むぎ書房
 趙義成(1994) 「現代朝鮮語의 -에格について」『朝鮮學報』第150輯, 天理: 朝鮮學會
 陳満理子(1996) 「現代朝鮮語의 -로格について」『朝鮮學報』第160輯, 天理: 朝鮮學會
 野間秀樹(1990) 「現代韓国語の名詞分類—語彙論・文法論のために」『朝鮮學報』第135輯, 天理: 朝鮮學會
 野間秀樹(1994) 「現代朝鮮語의 語彙分類의 方法」『言語研究』Ⅳ, 東京: 東京外国語大学
 野間秀樹(1997) 「朝鮮語의 文의 構造について」『日本語と朝鮮語의 対照研究』Ⅳ, 東京: くろしお出版
 野間秀樹編著(2018) 『韓国語教育論講座 第3卷』, 東京: くろしお出版

註

(1) 李善姬(2018)では, 「가 있다」と「가고 있다」の格結合頻度を調査し, それを示した。位置変化の

結果継続をあらわす「가 있다」の用例540例のうち「-에」との結びつきが509例(95.3%), 「-로」との結びつきが25例(4.7%)の結合頻度の偏りをみせている。また, 移動行為の動作継続をあらわす「가고 있다」も用例190例のうち「-로」との結びつきが181例(95.2%), 「-에」との結びつきが7例(3.7%), 「-를」との結びつきが2例(1.1%)と, 結合頻度の偏りをみせている。これは動詞本来の語彙的な意味よりアスペクト的な意味によって結合する格に制限や偏りができると考えられる。今後, 移動動詞の語彙的な意味をさらに詳しく考察する際に, アスペクト的な意味は別途考察する必要があると思われる。

- (2) 「-로」「-으로」を合わせて, 「-로」と表記する。
- (3) 「-를」「-을」「-르」を合わせて, 「-를」と表記する。
- (4) 「-에게」「-한테」「-께」を合わせて, 「-에게」と表記する。
- (5) 「-로부터」「-를 향해」などのようなものである。
- (6) 1文中に場所名詞句が2つ現れる例が3例あるので, 用例数は1,189例であるが, 格助詞の合計数は1,192である。
- (7) 1文中に場所名詞句が2つ現れる例が2例あるので, 用例数は590例であるが, 格助詞の合計数は592である。
- (8) 限界性については, 工藤(1995)に詳しい記述がある。
- (9) 「공원에서 걸었다(公園で歩いた)」の「공원에서」は「歩く」という動作が行われる場所であり, 位置変化をあらわす移動の場所として考えられないので, 本稿の研究対象からは外す。
- (10) 移動動詞の後置詞化に関しては, 이성하(2002)に詳しい考察がある。
- (11) 남기심(1993)に「-에」は「도착지(到着地)」, 「-로」は「지향점(志向点)」としてある。しかし, 実際の使用においてはその区別が難しい場合が多くある。ただし, 李善姬(2018)に, 「-에」より「-로」が方向性が強いということを述べたが, 詳しいことは李善姬(2018)を参照されたい。
- (12) 「건너다」が到着格や方向格と結びつく場合は, すべて「-아/어 가다」「-아/어 오다」の形である。
- (13) 今後, 「-로」を到着点と志向点に分ける必要があるだろう。